

## 新たな挑戦

# 第2ステージへ歩み出す 「シーニックバイウェイ北海道」



シーニックバイウェイ支援センター  
事務局長

かとう けいこ

### 地域の「宝」探し

『みち』をきつかけに地域住民と行政が手をつなぎ、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを目指す運動が「シーニックバイウェイ北海道」。主役は地元で暮らす人々と、地域にある宝です。

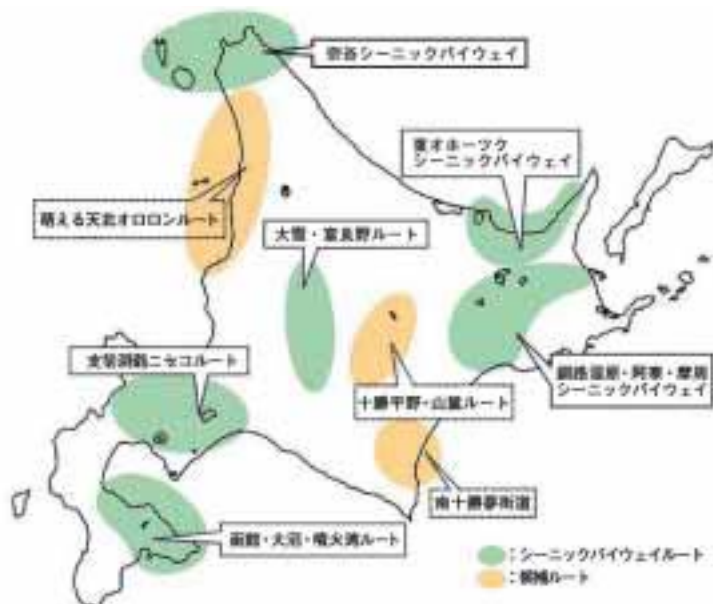
宝とはなんでしょう。どこまでも続く緑の畑と防風林が織り成す農業景観、往来の多い国道沿いに楚々と咲く野の花の群生、北海道の大切な文化のひとつであるアイヌ文化を次の時代に引き継ぐこととしている若者たちも間違いなく宝です。

でも、あまりに身近にありすぎて、その魅力に気づかずに大切にされていない宝が多いのも、また事実です。シーニックバイウェイ北海道の広報を担当している私の仕事の一つに、地域の宝を地元の人と一緒に探し、再認

識し、守り育てていくことがあると考えています。

「地域の宝を探そう」それを具体化したのが、2006年6月にスタートした「トレジャーハント」という事業です。シーニックバイウェイ北海道ルートに眠る宝を探しに、地図を片手に出かけよう、ルート内に住む人たちが考えたクイズに答えながら、実際に現地に行つて地域の人と交流してもらおうというのが目的です。

こつた思いで昨年度実施したトレジャーハントを更に進化させた「シーニックドライブマップ」として、現在6ルートにおいて製作中です。ドライブ観光する人たちにとって役立つ情報（北海道遺産、花の見所、とるばとの駅、オートリゾートキャンプ場、ユニバーサルトイレなど）が満載のトレジャーマップや、地元の人がすすめるドライブコース、そしてクイズラリー、スタンブラリーをコンパクトにまとめた内容です。ゴールデンウイ



道内に広がるシーニックバイウェイ

ークには、北海道内の道の駅ほか、観光案内所などで発売予定です。この地図を片手に北海道のたくさんの宝をぜひ探しに来てください。

### 魅力的なルートを支える「人」

シーニックバイウェイ北海道は、現在6つのルートがあります。2005年4月認定の支笏洞爺ニセコルート、大雪・富良野ルート、東オホーツクシーニックバイウェイ。2006年4月認定の宗谷シーニックバイウェイ。同年11月認定の函館・大沼・噴火湾ルート、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイです。そして、認定に向け熱心に活動を続けている3つの候補ルートがあります。

道内180市町村のうち140ほどを訪ねた私ですが、シーニックバイウェイの仕事に携わるようになって、イメージが一新した町や地域がたくさんあります。たとえば、昨年2度訪れた宗谷シーニックバイウェイの中の、稚内市、利尻島、礼文島は好感度が一気にアップした場所といえるでしょう。札幌からの距離、そして冬期間の交通の便の悪さがマイナスに評価されがちな地域です。しかし、札幌から利尻島までの飛行機の直行便を利用することで、距離感が気にならなくなりました。そして時間短縮ができた分、じっくりと旅ができました。

フェリーから眺める利尻富士の美しさ、宗谷丘陵や礼文島全体を包む深い緑の豊かさは格別です。初夏と秋に訪れたのですが、いずれの時期も札幌ではなかなか食べられないような、レベルの高い海の幸と山の幸をいただくことができました。

さらに、地域のすぐれた食材をネットワーク化しようと奔走している女性。バスガイド歴20年超のキャリアを生かし、戦時下の稚内とロシアの歴史を分かりやすく案内し、原生花園の花について丁寧に説明するために努力



礼文島から見た「大切な場所」利尻島

している女性。利尻島を訪れる人をアジサイでおもてなしたいと、たくさん苗を育て道路沿いに植え続けているホテル経営の男性など多くの友人ができました。旅の満足度は、景色や食の魅力によるところが大きいです。さらに、もう一度そこに行きたいという気持ちになるのは、「あの人が作るあの料理が食べたい」、「あの人ももう一度会って、ゆっくりと話したい」という強い思いがあるからだと思います。旅先で出会った人によって、その土地が「観光地」から「大切な場所」へと変わることを実感しています。

### 継続すること、広げていくこと

シーニックバイウェイ北海道は、2年間の試行期間を経て2005年に本格的にスタートしました。試行期間を含めて活動5年目を迎え、各ルートで活動する皆さんとお話をする中で、共通の課題が見えてきました。スタート時の意気込みを維持すること、自分たちの活動の方向性を明確にしていくことの難しさ。活動を継続するためには資金が不可欠ということ。アドバイザーやコーディネートをする人材やサポート体制が十分ではないことなどです。

「シーニックバイウェイ北海道」という取組みは、A町、B町といった行政区分を越えて地域の人たちが集まり、道路沿いの景観を守ること、バリアフリーの施設を増やしていくこと、地域に点在していた観光資源をつないで観光客にとって有益な情報提供をすることなど、活動内容やその可能性は非常に広いものです。

目的を持った人たちが集まって自主的に活動する中で、必要に応じて、行政や専門家がアドバイスや応援する必要があるのだと思います。「これまでなかった、こんな新しいことをしてみたい。それが、地域のためになる」といった純粋な思いをつなげ実現していくことが、結果的に「まちづくり」、「ひとづくり」になるのです。

たとえば、景観を阻害している看板撤去事業を例にとり、景観におけるその看板の客観的な状況を写真に収める、看板の立て主や地主などとの交渉、実際に撤去する一調査をし、話し合いを繰り返す、作業を行うまでには相当な時間がかかります。

でも、地域の景観を守るためには、地主を含めた地域に住む人みんなに理解してもらうことが大切だから粘り強く続けています。そして、実際に看板を撤去して「景観が良くなったな」と多くの人に理解してもらい支持し

てもらったことによって、「こうした取組みは継続していくのです。」

「自分のまちのこと、地域のことを真剣に考えて仲間とともに行動する。北海道を愛する人たちを増やすこと。」これが、この取組みの現時点での目標ではないかと私は考えています。ゆっくりとした歩みですが、シーニックバイウェイ北海道は新たなステージへと確実に進んでいます。



地道な花植え活動が道路沿いの景観を守ります

### プロフィール

北海道足寄町生まれ。放送局（広告代理店、経済産業省北海道消費者相談室に勤務の後、2000年1月～06年3月まで「花新聞ほっかいどう」創刊編集長。同年5月より現職。北海道造園建設業協会理事など公職多数。

# 新たな挑戦

## 21世紀の日本の切り札・北海道

- 治水へのたゆまぬ努力を -



(財)リバーフロント整備センター理事長  
立命館大学客員教授  
たけむら こうたろう  
竹村 公太郎

### 北海道の米の値段

「21世紀、北海道は日本の切り札になる」と文章にも書き、機会があればいろいろなところでも述べてきた。私のその主張は、自分の仮説に基づくもので、確信はあつたが証拠はなかつた。しかし、昨年、その具体的な傍証を手にした。それは米に関する報道記事であつた。2006年、北海道産の米「ほしのゆめ」がコシヒカリの値段を抜いた、という小さな新聞記事があつた(朝日新聞平成18年8月18日付け夕刊)。

北海道は稲作の北限である。それも全道で米が収穫できるわけではない。収穫できるのは、石狩平野を中心とした西側だけだ。道東は、夏には霧が湧きヤマセが吹きつけ、稲にとって必要な日照と気温が不足する。

開拓で北海道に入った人たちは、米にこだわった。泥炭地の湿地を乾田化し、客土をして、稲の品種改良を繰り返した。



朝日新聞記事(平成18年8月18日付け夕刊)

返した。北海道の過酷な大地に向かって、気が遠くなるような努力を積み重ね、成果を上げていった。だが、彼らも北海道の気象だけは、改良することはできなかった。

北海道産の米は、評判が良くなかった。安定的に収穫できないことに加え、味も落ち、中央の米市場では「やつかいどう米」と揶揄されたりもした。その道産米が、国内最高の値段で評価されたのだ。

北海道の人々のこれまでの努力と近年の北海道の気温上昇が、良好な米の収穫を可能とした。

### 食料逼迫の21世紀

21世紀、世界は食料の逼迫に見舞われていく。60億人を突破した世界の人口は、今世紀中頃には90億人へと増大し続けていく。

人口増加によって森林は伐採され、耕地開発が広がり土壌は劣化し、過放牧により植生は家畜に喰われ、砂漠化が急速に広がっていく。世界各地の水の過剰取水によ

り、河川は断流し、湖は縮小し干上がり、化石地下水は低下し続けていく。

これに、温暖化が追い討ちをかけていく。大地からの水分の蒸発量が増え、世界の穀物大陸は乾燥化していく。短期間の気象の激変に生態系は適応できず、農業を支えていた生態系が混乱していく。

さらにダメ押しが、資源の枯渇である。大量の穀物収穫を可能としてきた化学肥料が、地球上から姿を消していく。化学肥料の原料のリン鉱石と原油が、枯渇していくからだ。特に、リン鉱石は太古の鳥たちの糞の化石であり、その量には限度がある。

自国内のリン鉱石の賦存量の限界を知った米国は、リン鉱石の輸出を止めてしまった。ヨーロッパ工業会の推計によると、すでにリン鉱石の生産量のピークは過ぎ、今世紀後半には完全に枯渇してしまう。

21世紀の未来、世界各地から安い食料が日本に入ってくることはない。

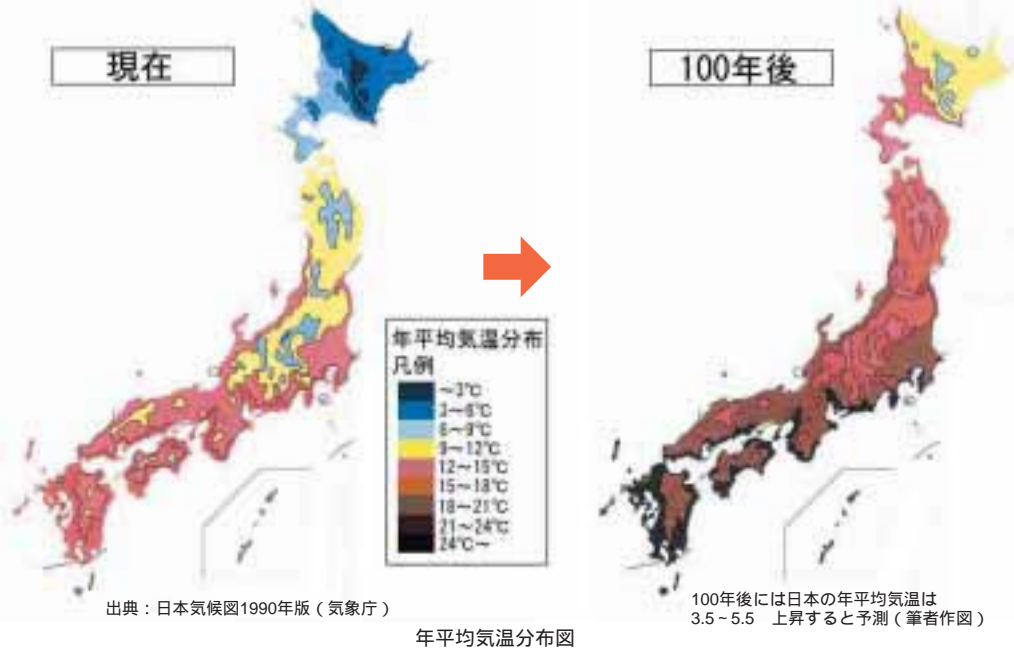
### 日本の切り札・北海道

人口急増、急激な温暖化、資源の枯渇で、世界の食料供給基地が衰退し、各国は食料自給の必要に迫られていく。もちろん日本もだ。

しかし、この地球温暖化と、資源逼迫のなかで、日本列島では奇跡に近いことが起きていく。それは、北海道の登場である。北海道が日本の食料基地として名乗りを上げていく。

過去、冷たい気象に苦しんできた北海道の全域が、温暖で優良な穀倉地帯に変貌していく。もし2 上昇すれば、北海道全域が今の東北地方となり、もし4 上昇すれば今の関東地方となる。

高緯度の北海道は、温暖化で降雨が増えるので、大地の乾燥化は心配なさそうだ。



また、肥料資源が枯渇していく中、北海道の家畜の糞尿は大切な有機肥料となる。

北海道は広い。東北6県と栃木、茨城、群馬の3県を足した面積を誇る。その北海道全域が、温暖で、雨に恵まれ、有機肥料が豊富な穀倉地帯に変身する。

食料逼迫の21世紀、北海道は日本の切り札となる。

### 豪雨に襲われる北海道

温暖化に伴い、地球規模で降雨パターンが大きく変化していく。特に高緯度帯では、海と大気間の水循環が活発化し、前線、低気圧、台風による豪雨が頻発していく。

北海道は、豪雨に弱い。何しろ大型台風や豪雨の試験を、今まであまり受けていなかった。

九州は台風の玄関口であり、歴史的に多くの豪雨の試験を受けてきたので、水害に対する耐性は備えてきた。しかし、その九州でさえ、今でも豪雨に悩まされ、多くの人命と財産が失われている。

豪雨に対する耐性が弱い北海道に、豪雨が襲えばその被害は甚大となる。

現在の北海道が持っている降雨データは、豪雨が少なかった過去のデータである。気象が激変していけば、過去たまにしか発生しなかった豪雨は頻発し、かつて経験しなかったような大規模な豪雨も発生していく。

### 準備しなければならぬこと

無条件で、北海道が21世紀の日本の食料基地になれるわけではない。そのための努力と準備が必要となる。

21世紀の北海道の気象は、過去の様相とは異なっていく。そのことを認識して、治水の安全性の向上のための努力が必要だ。

治水の安全性は、何十年単位では成し遂げられない。日本各地方は、江戸時代以降、何百年単位で治水事業を積み重ねてきた。それにも関わらず、近代化の過程で大水害を受け続けてきた。被災後、急ぎでやった災害復旧工事は、自然豊かな河川を消していつてしまった。

北海道はその失敗を繰り返してはならない。自然豊かな河川を守りながら、21世紀の大災害に対応していくことが、北海道に求められた使命である。

そのためには、治水への努力を一步一步進める以外にない。

温暖化で気象が凶暴化していく21世紀、日本の食料の切り札・北海道での治水の役割は大きい。



石狩川流域に広がる穀倉地帯（写真提供：北海道開発局）

### プロフィール

1945年生まれ。東北大学工学部土木工学科68年卒、70年修士修了後、建設省に入省。近畿地方建設局長を経て国土交通省河川局長。02年に退官、04年より現職。工学博士。

現在、立命館大学客員教授、非営利特定法人・日本水フォーラム事務局長をつとめる。

著書に「日本文明の謎を解く」（清流出版）、「土地の文明」（PHP研究所）、「幸運な文明」（PHP研究所）、「小水力エネルギー読本」（オーム社 共著）など。

## 新たな挑戦

## 函館国際水産・海洋都市構想

～ マリンサイエンスで世界をリード～



函館国際水産・海洋都市構想推進協議会  
会長 高野 洋蔵

## 函館国際水産・海洋都市構想とは

函館は、日本最初の国際貿易港として開港されて以来、「北洋漁業・造船業・青函連絡船のまち」として繁栄してきたという歴史的背景、また、太平洋と津軽海峡に面し、暖流や寒流が流れ込むという地理的・自然的特性のもと、イカ・コンブ・サケ・ウニ・アワビ等の豊かな水産・海洋資源に恵まれるなど、「海」が日々の暮らしの中で大きな役割を果たしてきました。また、水産・海洋学における屈指の研究・教育機関である北海道大学大学院水産科学研究院やユニークな情報系大学として注目を浴びている公立はこだて未来大学など、数多くの高等教育機関が立地しています。

このような海洋研究に極めて恵まれた環境を活かし、

水産・海洋に関する研究や技術開発、事業展開を図り、産業・経済の活性化や新たな文化の創造を目指し、マリンサイエンス（水産・海洋科学）で世界をリードする函館を築いていこうとする取組みが、平成15年に策定された「函館国際水産・海洋都市構想」です。この構想は市民に大きな夢を与えているとともに、国内外からも注目を集めています。構想の推進組織として、地域の産学官による「函館水産・海洋都市構想推進協議会」（以下、推進協議会）が設立され、この構想を具現化し、人類共有の水産・海洋に関する世界貢献の一翼を担うためにも、地域が一丸となり取り組んでいます。

国際的な海洋研究の先進地としては、イタリアのナポリ市、アメリカ・マサチューセッツ州のウッズホールがあり、世界各地から多くの研究者が集まり、最先端の研究が行われています。函館市はこれらの先進地のようないくつかの観光と学術・研究、そして市民生活が融合した街づくりを目指しており、このような点においても、この構想が函館市の街づくりに大きな影響を与えています。

構想の輪を世界に広げるため、中国や韓国などの海外との交流にも積極的に取り組んでいます。こうした国際性や将来性に高い評価をいただき、函館国際水産・海洋都市構想は今年2月に日本計画行政学会計画賞「特別賞」を受賞しました。

## 学術研究機関の集積と研究技術開発

従前より、函館地域には学術研究機関や水産関連の企業などの研究部門が集まり、水産・海洋に関連する製品・技術開発や特許取得に向けた研究が行われてきました。特に、平成15年に科学技術研究に関わる規制等を緩和する「マリン・フロンティア科学技術研究特区」の認定を受けて以降は、函館市や市内の各学術研究機関が産学官連携の環境整備に力を注いでいます。

そのような中、北海道大学大学院水産科学研究院は地域開放型の産学連携施設として平成16年に「マリンフロンティア研究棟」を、また、平成18年には「マリンサイエンス創成研究棟」を建設し、地域企業との共同研究やプロジェクト型研究を行う場として活用しています。

「マリンサイエンス創成研究棟」には、水産・海洋に関する産学官連携拠点施設として函館市の「産学官交流プラザ」が合築整備されており、運営については、北海道大学の地域連携担当教官が函館市と協力して、産学官連携に関する相談など、共同研究の支援に取り組んでいます。こうした大学と自治体の協力関係は、全国でも初めての取組みです。

このほか、函館市は、今年4月に「函館市臨海研究所」をオープンしました。この研究施設は、函館を代表する大正期の建築物である旧函館西警察署庁舎を、外観は創建当時のデザインをそのまま復元し、内部を近代的な貸研究室として再整備したものです。

すでに、海藻の利活用に関する研究や、海洋環境観測機器の開発などに取り組む6社が研究を始めており、市民や観光客などがその研究の様子をガラス越しに見学することができるとなっています。

研究・技術開発については、文部科学省の都市工リア産学官連携促進事業（一般型・発展型）や21世紀COEプログラム、経済産業省の地域新生コンソーシアム研究開発事業などの大型の研究開発事業に取り組んでいます。

特に、都市工リア産学官連携促進事業では、北海道大学道立工業技術センターを中心に企業60数社が参画して、道南を主産地とする昆布の一種であるカノアの増養殖技術の確立と健康食品・化粧品等の開発、イカの活魚輸送やイカ墨精製技術の開発など、地域の水産物のブランド化に向けた研究・製品化が順調に進んでいるとされており、その経済波及効果は百億円単位になると試算されています。

構想の中核となる  
国際水産・海洋総合研究センター計画

この構想を推進するうえで、国や大学・道・民間等の学術研究機関の誘致と構想の中核となる施設の整備は必要不可欠となっています。

このため、函館市および推進協議会では、異国情緒豊かな西部地区に位置し三方を海に囲まれた旧函館ドック跡地（約23ha）において、「国際水産・海洋総合研究センター」の建設を計画しています。



国際水産・海洋総合研究センターの建設が計画されている函館港弁天地区

研究センターは、研究機能と港湾機能が一体となった一大水産・海洋研究ゾーンの形成を図ろうとするもので、その前面には、港内に点在する官公庁船等の集約、国内外の海洋調査船や練習船などが寄港できる係留施設の整備が北海道開発局により進められています。

学術研究機関の集積により、同じ施設内でそれぞれ得意な分野の研究を展開することができ、研究コストの軽減や運営の効率化が図られるとともに、研究者同士の交流や学術的交流が飛躍的に促進され、高度な研究成果が生まれるものと考えています。

また、研究センターは、これまでに例のない国・大学・道・市の学術・研究機関が集積した複合型の研究施設であり、我が国の水産・海洋分野における科学技術の高度化に多大な貢献をし、マリンスイェンス研究分野で世界をリードすることにより、「国際貢献と水産・海洋研究の牽引」の役割を果たすこととともに、「地域貢献地域再生」の役割も担うことから、関係機関と連携を図りながら、早期整備を目指しています。

研究センターの整備に向けた取組みとしては、平成16年に国の地域再生計画の認定を受け、函館市が国や大学、道など10機関27名で構成する「整備検討会議」を設置し協議を進めているほか、昨年は、世界の第一線で活躍されているアメリカ、イタリアなど6か国の水産・海洋分野の研究者を函館にお招きし、国際シンポジウムを開催しました。出席した研究者からは構想や研究センターに関する多くの期待の声寄せられました。なお、このシンポジウムを記念して、講演者やパネリストとともに「函館国際水産・海洋都市構想実現に向けたメッセージ」を採択し、一丸となって構想を実現することを再確認しました。

水産・海洋と市民生活の調和に向けて

推進協議会や函館市などでは、「水産・海洋と市民生活の調和」を目指し、市民一人ひとりの水産・海洋に関する意識を高めるための取組みを行っています。

その一つとして、現在、駅や空港、デパートなど市内7か所に「まちかどデジタル水族館」を設置しています。これは、身近な海の中の様子を市民や観光客に知って

ただ、海の豊かさ、海と函館とのつながりを理解していただくため、函館周辺海域の海洋生物等の映像を放映しているものです。イカやサケ、コンブなど、普段小売店等で目にしていても、なかなか実際に生活している様子を見る機会がない海洋生物を紹介しており、多くの人が足を止めて観賞しています。



函館周辺海域の海洋生物を紹介する「まちかどデジタル水族館」

また、平成17年には、海を知り、海と親しむをテーマに市民参加型のイベント「オーシャンウィーク」を開催しました。期間中は、国内の練習船の一般公開や水産・海洋に関するシンポジウム、パネル展等を開催し、多くの市民で賑わいました。平成19年秋にも2回目を開催予定です。このような取組みを積み重ね、市民が海をより身近に感じることに、当構想に対する市民理解を深めるとともに、現在の推進協議会を発展させた「(仮称)函館国際水産・海洋都市推進機構」の早期設立を図り、今後は推進機構を中心として、この構想の具現化をさらに強力に進めたいと考えています。

プロフィール

（株）道水代表取締役会長。2000年に函館商工会議所会頭に就任。このほか、北海道中小企業団体中央会道南支部理事、日本冷凍事業協会副会長、（財）函館地域産業振興財団理事長など。2003年より函館国際水産・海洋都市構想推進協議会会長。





台湾で人気の長いもジュース



台湾輸出用 4L(1400g/本)



国内販売用 2L(900g/本)



機械による洗浄



はい積みロボットによる積み上げ作業

### 地域団体商標の取得

十勝川西長いもは平成18年11月10日、特許庁から地域団体商標の認定を受けた。

早速地元の花亭製菓様が原料に使った、「十勝川西長いもシフォンケーキ」が発売された。

### HACCPに挑戦

平成16年、輸向けに傷の少ない高品質洗浄と、取り扱い数量の増加に対応するため施設を一新した。経費の大きなウエイトを占める人件費圧縮のため、自動投入設備、カメラ形状選別、はい積みロボット、トレーサビリティ対応など、IT技術の粋を集めた近代的施設に生まれ変わった。今は、消費者の安全安心の要望にこたえるため、施設をHACCP（ハザップ）認定施設にすべく業務及び施設の総合的な点検整備を行っている。

### 産地化成功は基盤整備

長いもを作るには水はけのいい石の出ない畑が必要であるが、基盤整備の進展により作付可能な畑が増え、排水改良で高品質が確保され産地銘柄を確保することができた。

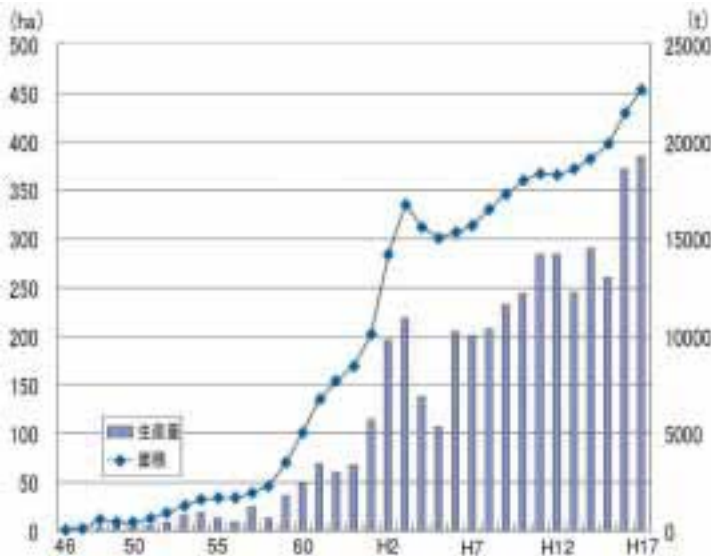
最近では地球温暖化の影響もあり、夏場早魃<sup>かんばつ</sup>気味の年も増えてきており、灌漑<sup>かんがい</sup>用水など新たな基盤整備要望も高まってきている。産地前進のために農業基盤整備に引き続き力を入れて行きたい。

### 農業の前進は地域経済の前進

従来ハコ物行政に依存の高かった北海道経済も、今、地域経済の自主・自立が求められている。大きな産業のない北海道で地域経済がよくなるためには農業の前進が不可欠であるが一方、米・麦・てん菜・生乳など代表的な

農畜産物は需給のミスマッチという課題を抱えている。北海道は従来の一次産業の原料移出にとどまらず、北海道内での製品加工を高める産業クラスター作りが是非とも必要である。

そのために、製品物流インフラの核となる幹線高速道路網の整備を急ぐとともに、バイオエタノールなど農産物の多用途利用による新たな付加価値と地域産業創造に国家プロジェクトとして全面的にバックアップ支援をお願いしたい。



川西長いも 面積と生産量の推移

### プロフィール

1993年帯広川西農業協同組合代表理事組合長、農協合併により2003年より現職。  
このほか、1993年より株式会社帯広市農業振興公社代表取締役、川西協同振興株式会社代表取締役、1995年より社団法人帯広物産協会会長、1998年より十勝地区農協組合長、財団法人十勝圏振興機構理事など。



## 新たな挑戦

## アイヌ文化振興法10年

- その意義と現代的課題 -



国立民族学博物館名誉教授  
ささき こうめい  
佐々木 高明

## アイヌ文化振興法の成立

通称「アイヌ文化振興法」、正式には「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」という法律が、衆参両院で全会一致で可決、成立したのは、ちょうど今から10年前の1997年5月8日であった。その第一条には、「この法律は、アイヌの人々の誇りの源泉であるアイヌの伝統及びアイヌ文化が置かれている状況にかんがみ」その文化振興や伝統についての知識の普及・啓発を図る施策を推進することにより、「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、あわせて我が国の多様な文化の発展に寄与することを目的とする」と明記されている。

長い歴史の中で育まれてきた文化やその伝統は、民族が自らのアイデンティティを求める場合、その中核をなすものであり、「それが民族の誇りの源泉である」と位

置つけたところにこの法律の大きな特色がある。しかもその民族としての誇りが十分に尊重される状況にはないことを認め、そうした民族の誇りが尊重される社会の実現のためには、その民族文化を振興し、その文化伝統についての知識を普及・啓発して、アイヌ文化についての国民的理解を深めることが必要だと強調している。それはまた多文化の時代を迎えた我が国の国民文化の多様な発展にも寄与するところが多いというのである。これは我が国初めての民族法といふべきものであった。

## 二つの歴史認識

アイヌ文化政策の理念

このユニークな民族法を生み出す基礎になった理論と政策を具体的に審議したのが、内閣官房長官の私的諮問機関として1995年3月に設置された「ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会」（略称「ウタリ懇」）であった。元最高裁判事の伊藤正己氏を座長に選び、作家の司馬遼太郎氏をはじめ、私を含む7人の委員で構成されたこの懇談会は、総理官邸を会場に12回の審議を重ね、翌1996年4月に、その報告を答申した。

その報告の中で、我々が強調したのは、次の二つの歴史認識であった。その一つはアイヌの人々を日本列島北部の先住民と認めたことである。これは当然のことと思われるが、日本政府は1980年に、その前年に承認した「国際人権規約」に規定するような少数民族は我が国にはいないと国連に報告している。アイヌ民族の存在が無視されたわけで、このような政府の従来の見解を否定した点に、第一の歴史認識の大きな意義がある。第二の歴史認識は、近世・近代の歴史の中でアイヌの社会や文化の破壊が進んだことを全面的に認めたことである。とくに明治以降、いわゆる同化政策が強化されることにより、伝統的な生業や生活慣行などが厳しく制限・禁止され、その結果、アイヌの社会や文化が決定的な打撃を

受け、差別と貧窮を余儀なくされたことを明確に指摘している。この種の歴史認識が公的に認められたことも画期的な事実だといふことができる。

こうした歴史認識にもとづき、新しいアイヌ文化政策の基本理念は、「今日存立の危機にあるアイヌ文化の保存振興及びアイヌの人々に対する理解の促進を通じ、アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現と国民文化の一層の発展に資することである」と述べている。この文章の後半は、前述のようにアイヌ文化振興法の第一条にも引用され、新法の理念を表現するものとなっている。



神々(カムイ)の護りに感謝し平和な暮らしを願う「カムイノミ」の儀式(写真提供:新ひだか町アイヌ民俗資料館)

## アイヌ文化の振興とイオルの再生

このような基本理念にもとづく新しい施策については、アイヌに関する総合的かつ実践的研究の推進、アイヌ語を含むアイヌ文化の振興、伝統的生活空間（イオル）の再生、アイヌの人々の理解の促進、の四つを柱に展開すべきことが、『ウタリ懇報告』の中で指摘されている。さらに、これらの業務を執行するために「アイヌ文化振興・研究推進機構」が指定財団として設立され、事業の展開を行うことになった。

ところが、同財団の事業の実施状況を見ると、「アイヌに関する総合的・実践的研究の推進」、「アイヌ語の振興」、「アイヌ文化の振興」、「アイヌの伝統等に関する普及啓発」の四つの分野を中心に事業の展開が行われ、その範囲内ではそれぞれかなりの成果をあげてきている。しかし、さきの『ウタリ懇報告』で指摘された四つの施策の柱と比較すると、の「伝統的生活空間（イオル）の再生」という分野が欠落していることがわかる。

明治以前の北海道の大地はシナノキやカエデ、ナラやニシなどの落葉広葉樹林で広くおおわれていた。アイヌの人たちは衣食住などの日常の糧のすべてを、この森とその周辺に広がる自然に求めていた。彼らはイオルとよぶ伝統的な生活領域を川筋ごとに形成し、植物資源や動物資源を巧みに採取・加工・利用して豊かな伝統文化を生み出していた。神々への敬虔な祈りも、その自然との営みの中に深く根ざすものであった。

つまり、アイヌの文化は自然との共生を基盤に成立してきたものであり、アイヌ文化の保存・振興は、その文化を生み出し育んできた自然の保全・再生とその自由な利用が保障されなければ不可能である。例えばアイヌの伝統的衣装アットウシをつくるにはオヒョウの樹皮を剥いてその繊維から糸を作るのだが、その樹皮一つを得る



樹皮の繊維で織ったアイヌの代表的な衣服「アットウシ」  
（写真提供：財アイヌ文化振興・研究推進機構）

ためにも営林署への手続きなどが大変である。

この点を何とかしなければ、アイヌの伝統文化を守り、それを発展させることはできない。これが「アイヌの伝統的生活空間（イオル）の再生」を考える際の基本的な発想であった。

幸い2004年には、この問題を検討する専門の委員会が発足し、翌2005年6月には「アイヌの伝統的生活空間の再生に関する基本構想」がまとめられた。そこでは「自然と共生してきたアイヌの人々がその文化の保存・継承・発展を図る上で必要な自然素材を一定のルールのもとで自由に獲得できる自然空間」を整備することが明記され、昨2006年からその事業がよつやく緒につくことになった。

### 残された問題

アイヌ文化振興施策の意義

このようにしてアイヌ文化を育む母なる森とそれをめ

ぐる自然の復原・育成・利用の途が開けることになった。だが、どのような自然を、どのように復原・育成・利用し、アイヌ文化の振興と発展につなげていくのか。具体的な管理・運営をめぐるさまざまな問題はまだ残されている。また北海道全体でイオルの森のネットワークをどのように作り上げていくのかも、将来に残された重要な課題である。

しかし、こうしたさまざまな課題を抱えながら、アイヌ文化を振興し、アイヌの伝統への国民的理解を求めつづける背後には、国際化の時代、多文化の時代といわれる現代の問題のあることを忘れてはならない。そこでは地球規模で異なる文化、異なる民族の間の理解と交流が要請されるが、その前提として日本国民の中における異なる文化、異なる民族についての十分な理解がまず必要なのは言を俟たない。日本の国民文化の中にあるアイヌ文化という異なる文化の特質をよく理解し、その民族の誇りが実現するよう図ることなしに、地球規模でのさまざまな異なる民族や文化との交流を論ずることは恐らく不可能であろう。

このような意味で、アイヌ文化の保存・振興事業の推進は、21世紀における我が国の国民文化の多様な発展を促進するために、欠くことのできない重要な施策であることを、いま一度銘記すべきだと思つのである。

### プロフィール

1959年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。立命館大学助教授、奈良女子大学教授を経て、1974年国立民族学博物館名誉教授。1993年同館館長。1997年国立民族学博物館名誉教授。同年財アイヌ文化振興・研究推進機構理事長（2003年退職）。1998年紫綬褒章受章、2003年勲三等旭日中綬章受章。著書『稲作以前』（1971）、「照葉樹林文化の道」（1982）、「東・南アジア農耕論」（1989）、「日本文化の多重構造」（1997）、「多文化の時代を生きる」（2000）、「山の神と日本人」（2006）その他多数。

## 北海道の魅力

### 感幸の大地・北海道



株式会社リクルート北海道じゃらん  
執行役員編集長

な なた  
ヒロ 中田

#### 64回訪れても飽きない北海道

北海道の大地を生まれて初めて踏んでから11年たちました。その間、仕事が仕事なだけに（北海道の『食』と『観光』雑誌の編集）道内をあちこち飛び回ってききましたが、北海道の持つ魅力の10%も堪能していない、北海道を知るには100年かかる、そんな風に思っています。それくらい、北海道の魅力は奥深いものがある。ぼくはそのことを4×4×4=64という数式で表現しています。最初の4は『エリア』の4です。国土の21%を占める広大な土地を持つ北海道は、道北、道東、道央、道南の4つのエリアに分けることができます。同じ北海道でも道北と道南では風景がまるで違いますね。

一番目の4は『季節』の4、つまり春夏秋冬の四季です。日本で北海道ほど四季の移ろいがはっきりしている場所を知りません。寒い冬は厳しいですが、それを乗り越えるからこそ、春が来た時の感動が倍増します。

最後の4は『観光資源（コンテンツ）』の4。自然・花温泉 食 アウトドア・体験。北海道にはいずれも一級品の4大コンテンツが揃っています。ですから、北海道を満喫しようと思ったら、『エリア』×『季節』×『観光資源』(4×4×4)、つまり最低64回の訪問が必要となるわけです。

#### 温泉地の数では日本一

さて、本稿では、北海道の魅力を観光振興に必要な8要素に分けて紹介していきます。その8要素とは、一泉・一食・一物・一景・一体験・一催・一駅・一花です。まず、『一泉』、つまり『温泉』について。日本で温泉と言いつつ、草津温泉のある群馬県とか、別府、由布院温泉のある大分県などが有名ですが、実は、温泉地数が一番多いのは北海道なのです(251)。第二位の長野県は239)。北海道には180の市町村がありますが、温泉がない市町村は25もありません。どこに行っても温泉にありつけるのが北海道の魅力なのです(公共温泉も多く、その数約180)。数の多さだけではありません。登別温泉や川湯温泉に代表されるように、泉質の良さも自慢です。特に川湯温泉はすべての宿が自家源泉を持つ源泉かけ流しの温泉街。宿の経営者も若手が多く、今、最も注目



全ての宿が自家源泉を持つ川湯温泉



北海道産生乳で作られた「白いプリン」

を浴びている温泉地です。もちろん景色の良さも自慢です。海川、湖、そして山、牧場を見渡す露天風呂がたくさんあります。

#### スイーツ王国・北海道

次に、『一食』、つまり『グルメ』です。北海道「カニ、寿司、ラーメン、ジンギスカン」というイメージが強いですが、これら以外にも人気グルメが続々登場しています。たとえば『スープカレー』。札幌生まれのスープカレーがここ数年で大ブレイクしており、札幌ではスープカレー店が次々出店、ついに200店を超えました。大のスーパーカレーファンである人気タレント大泉洋さんもオリジナル商品を企画、ヒット商品になっています。

また、『白いプリン』に代表される北海道スイーツが注目を集めています。北海道は牛乳、小麦、砂糖(てんさい)、小豆、フルーツなどスイーツに使われる原材料を多く生産しており、冷涼な気候もスイーツを食べる環境としてはぴったり。札幌や砂川をはじめとして、スイーツによる町おこしが全道各地で行われています。

昨年6月に誕生した『白いプリン』は3つのルールを守れば誰でも商品化できるという異色の北海道統一ブランド。石屋製菓、六花亭製菓、北菓楼、きのとやなど『白いプリン』を商品化したお菓子メーカー、洋菓子店などは120を超えました(3つのルールとは、「白いプリン」という名前にする。見た目は白いこと。北海道の生乳、牛乳を使用すること。北海道で生産すること)。1月には札幌で『白いティラミス』、『ホワイトコーヒ』も登場。北海道では当分白ブームが続きそうです。

地元食材を利用した新・ご当地グルメも増えています。昨年は『富良野オムカレー』や『深川そばめし』がデビュー。今年は『オホーツク北見塩やきそば』、『日本海えびタコ餃子』が誕生する予定です。

## 自転車観光の天売・焼尻島

3番目の『一物』は『お土産物』のことです。昔の北海道土産は熊の木彫りが定番でしたが、今では人気土産の上位を食べ物独占しています。カヤホタテなどの海産物が依然として人気根強いものの、最近ではお菓子が大人気。全国的に有名になつたお菓子も少なくありません。北海道のお菓子御三家は石屋製菓の『白い恋人』、六花亭製菓の『マルセイバターサンド』、ロイズの『生チョココレート』ですが、それに続けとホリの『タ張メロンピュアゼリー』、きのとやの『札幌農学校』などががんばっています。

4番目の『一景』は『自然・景色』のことです。世界自然遺産に登録された知床がブームになっていますが、北海道には知る人ぞ知る自然スポットがまだまだたくさん残っています。たとえば、自転車観光で売り出し中の天売島・焼尻島。両島とも周囲わずか12kmですが、素朴な自然と人（島民）が魅力です。

この夏にはマチャリ（レンタサイクル）で島を一周する『ツールド・天売・焼尻アイランド』というイベントも開催されます。また、英国で発達した『フットパス』を導入しようとして、根室などで歩道整備も進んでいます。国土交通省では、『シーニックバイウェイ北海道』を推進。地元の有志たちが



日本海に浮かぶ天売島(奥)・焼尻島



多数のお客様にご来場いただいた「HOKKAIDOラーメン祭り2006 in さっぽろ」

が集まって、景観整備や地元の魅力再発見に努めています。

## トム・ソーヤーの冒険ランド

5番目の『一体験』はその名の通り『体験メニュー』のことです。これはアウトドア、インドア問いません。北海道ではラフティング、カヌーを代表とする川のアクティビティやホーストレッキング、グライダーやパラグライダーのスカイスーツなどさまざまな体験ができます。廃線となった国鉄の跡地を有効利用したトロッコ体験も楽しいですよ。木の上で遊んだり寝たりするツリーハウスも増えてきており、北海道はまさにトム・ソーヤーの冒険ランド。今後は、団塊の世代を中心とした中高年の男性に北海道の人氣が高まっていくことでしょう。インドア体験は、そば打ち、陶芸、ガラス体験など。北海道は日本一のそば産地なので、そば打ちを楽しむ観光客が増えています。

6番目の『一催』は催事の催。つまり『祭・イベント』のことです。北海道にはYOSAKOIソーラン祭りやさっぽろ雪まつりなど有名なイベントも少なくありませんが、最近ではグルメ祭りが人気ですね。昨年初めて開催された『第1回HOKKAIDOラーメン祭り2006 in さっぽろ』には、道産小麦100%麵を使った北海道の食材たっぷりのラーメンを求めて3万5000名が行列を作りました。ほかに『しもかわつどん祭り』『幌加内新そば祭り』などの麵まつり、『根室さんま祭り』『石狩さけまつり』『あつけし牡蠣まつり』などの魚まつりなどもあります。札幌を文化・芸術のまちにしようとする有志たちが今夏ジャズ・フェスティバルを企画しています。音楽イベントにもご注目ください。

## 100駅ある道の駅王国

7番目の『一駅』の駅はJRの駅ではなくて、『道の

駅。北海道には100の道の駅があります。昔はトイレ利用と缶ジュース購入のための『道の駅』でしたが、今では利用者のニーズが様変わり。地元の食材を使ったご当地料理を食べたり、地域の特産品を買ったり、道路・天候情報や地域観光情報をパソコン端末でゲットできたりと、道の駅が高度化しています。広大な北海道はドライブ観光が主流のため、道の駅の利用率は本州に比べてとても高いと言えます。しかし、残念ながら満足度の高い道の駅とそうでない道の駅、大きく二極分化しています。道の駅長はほとんどが各市町村の首長なのですが、駅長の意識の差が影響しています。

最後の『一花』は『花』のことです。北海道の花はラベンダーだと思われがちですが、ひまわり、チューリップ、芝桜、ツツジなど春から秋にかけて北海道はフラワーパーダイスになります。昨年は『はなたび北海道』という名前のキャンペーンも実施、たくさんのお客さんが花を目的に北海道に来てくださいました。

以上、簡単に8要素別に紹介してきました。北海道大学大学院の石森教授は、「北海道観光は感幸の大地づくりを目指すべきだ」とおっしゃっています。ばくも同感です。北海道はもともとと幸せを感じさせうる大地になる可能性を秘めています。今後の北海道にご注目ください。

### プロフィール

本名は中田博人（なかつたひろと）。㈱リクルート北海道じやらん執行役員編集長。1960年広島県呉市生まれ。1984年慶応義塾大学法学部卒業後、㈱リクルート入社。10年間企業の人材採用ビジネスに携わった後、1994年7月海外旅行情報誌『エイビロード関西版』副編集長、1996年4月『じゃらん北海道』副編集長、1999年10月同誌編集長。雑誌編集の傍ら、テレビ番組『旅コミ北海道』（テレビ北海道）の企画・出演を11年間続けている。

## 北海道の魅力

## 「北海道発」全国区

タレント・映画監督

株式会社クリエイティブオフィスキュー代表取締役

すずい たかゆき  
鈴井 貴之

## 北海道では無理と言われ

大学生の頃から札幌の劇団に所属していました。その後独立し劇団を作り、札幌を中心として演劇活動を行っています。その活動の中で、テレビ、ラジオの仕事の機会に恵まれました。

もともと小学生の頃から8ミリ映画を撮り、行く末は映画を創るような仕事を幼い頃から夢見ていました。それが現実となり今まで3本程映画を撮影させていただいています。

北海道を中心とした本格的な芸能活動は、「無理」とされてきました。やはり東京や大阪ではないかと。出来ないと言われれば、「是非北海道で」と北海道人の開拓者魂みたいなものを自分の中で奮い立たせていました。現在の芸能活動は、北海道の皆さんが喜んでくれる、応援してくれたたまものだと痛感しています。

## 北海道ローカルが全国へ

大泉洋君と一緒にやっている北海道のローカル番組に「水曜どうでしょう」があるのですが、北海道のみならず全国的に認知していただいています。そのDVDもローカルの番組としては異例の売り上げです。現在、「水曜どうでしょう」(北海道テレビ)「は殆どの都府県で放送されています。

この番組が全国に広く受けた理由をウッセイにこの依頼が過去にあり、タイトルを『北海道で、水曜どうでしょう』はなぜあつたか』との原稿依頼を受けたが、よくわからない。ただ、楽しんでるだけ』としか言えない』となりましたが、方程式がある訳でもなく、本当の理由を求めることは難しいと思っています。

番組は4人の男達がある目的に向かい1週間程の旅をし、その中で起こる人間模様を包み隠さずそのまま伝える



## 地域特性に合わせたものづくり

るものです。例えば、海外へ航空券しか持たず宿泊は現地で直接交渉したり、スケジュールの都合で途中で取りやめとか、本来の目的とは異なるなどです。そこが我々の意図するこの番組の素直さというか、リアルさで、バラエティーではなくドキュメンタリーと思って製作しています。そして、視聴者の皆さんに製作の意図が伝わり、共感してくださったのではなからうかとは思っています。

昨今、テレビに真実はあるのか」とよくいわれています。また、無理矢理に達成とか結論をつける番組がよくあります。「どうして車の中の無駄話ばかり撮るんだ。観光地等紹介するものがあるだろう」とお叱りを受けていた時もありました。理解いたくためには時間が掛かりました。

北海道を基盤に活動しているとは思っていません。でも、「水曜どうでしょう」の放映後北海道以外の仕事も増えてきました。東京では、予算や人材が驚くほど揃っており、勉強の機会としては非常に良いと感じているところ。残念ながら地方はメディアの世界においてはまだ一歩立ち後れている現状です。

規模、内容で東京と肩を並べて創ろうと思えば、それは出来ないですね。だから、地方は地方としてどうやっていくべきか、どういふものを独自のものとして見だして創っていくかということが永遠のテーマになっていくのかと思います。東京で番組を創る時、いろんなものが用意されます。例えばが悪いですけども、戦いであれば戦車も戦闘機もご自由にお使い下さい。僕は、地べたを這いつくばるゲリラ戦法でしか闘ったことではないので、戦車とか戦闘機はいらないんです。

材料があれば、何でもできるんじゃないかという主張は違つと感じています。東京と地方のどちらが優れているのではなく、その地域の特性に見合ったものづくりをする



べきかなと思います。

よく地方はお金がないからと聞きます。お金がないなりに出来ることをやっていかないと次に進まない。大きなイベントじゃなくても、地味だけど「心温まる」展開を北海道では考えられるのではないのかと思います。

### 外から見える北海道の魅力

北海道が抱える経済的問題があつたり、夕張が財政破綻をしたり、また、2030年には北海道の人口が今よりも100万人減るといわれています。これからどうなっていくのか不安を抱えているんですが、北海道の中にいる人はもつと北海道を客観視しなければいけない時代に突入してきているのではなからうかと思つんです。北海道は、緑豊かな大自然とか言われてますけど、それは面積が広いだけであつて、森林占有率では東北の方が豊かだつ

たりします。北海道の方は、本州から来た方を森とか山に連れて行きたがると思つんです。でも仕事で一緒に回る東京のスタッフがあ「北海道だ」と言ったのは、山もない何もない地平線でした。「どこにでもある山が見えないのが北海道」と言われて、そうかと思つたんです。本州には山やビルがあつたりで、北海道のように地平線が見えるところがないです。そういうことを北海道の人間は、僕も含めてなんですが、気が付いてない。

また、僕が韓国に留学していた時も、「アジアというエリアで考えると、200万人規模の大都市の中で雪に覆われているのは札幌しかないんですよ」と言われまして。都会が雪に覆われている風景はアジアの人にとつては憧れであり、これが雪まつりにアジアの人がたくさん来られる背景にもあると思います。僕らは本当にアジアの中の日本や北海道というものを認識しているのだから

かと、もつともつと客観視しているんなものを見て、自分たちのことをよく知るべきかなと思います。

進学などでチャンスがあるなら、特に若い世代の方、北海道が好きで北海道で将来的に何かやりたいなと思つている方は「一度出て」、客観視をし、いろんな事を感じて戻ってきた方がいいと思いますね。北海道の中だけでは井の中の蛙になつてしまつ傾向にあると思います。

\* \* \*

6月30日と7月1日の2日間、夕張のスキー場で野外音楽祭をやるつと、北海道出身のGLAYなどそうつたるメンバーにご賛同をいただいています。

こつこつイベントを行うことには社会貢献であるとか売名であるとか賛否があるのですが、僕は純粹に夕張の皆さんと楽しいひとときを過こし、元気になつてほしいと思います。シャッターがいくつも下りたような商店街がよくニュースに取り上げられる夕張ですが、自分たちの街にもこつこつ楽しさがあるといふきつかけを作りたいなと思つています。どつこつものが一番いいのかを夕張の方と密にお話しさせていただきたいと思つています。

CUE MUSIC JAM-BOREE  
in ゆうばり  
日程: 2007年6月30日(土)  
7月1日(日)  
OPEN 10:00  
START 11:30~  
CLOSE 20:00(予定)  
雨天決行  
会場: 夕張・マウントレースイ  
スキー場  
HP: <http://cmj.office-cue.com>  
問合せ: ㈱クリエイティブオフィスキュー  
TEL. 011-219-0939  
電話受付時間  
(平日) 10:00~17:00  
(時間外自動音声対応)

### プロフィール

大学在籍中に演劇の世界に入り、1990年に劇団「OOP ARTS」を結成。1992年にクリエイティブオフィスキューを設立。1998年の「OOP ARTS」解散後は、タレント・構成作家として「水曜どうでしょう」(HTB)他数々の番組を手がけることも、映画監督としての道を開拓。